

## 料亭「八百善」の関連図面と文書に基づく建築の復元的研究

—文政年間から大正期を対象として—

主査 依田 徹<sup>\*1</sup>

委員 堀内 正昭<sup>\*2</sup>, 金谷 匡高<sup>\*3</sup>

浅草山谷にあった料亭「八百善」の建築は、江戸の料亭建築を代表する存在であった。19世紀初頭から大正12(1923)年の関東大震災による焼失まで、増改築、時として再建が繰り返されていた。この八百善の建築については八百善の当主である栗山善四郎家に図面等の資料が残されている他、「組立絵」と呼ばれる一種のペーパークラフトが遺されていた。本研究ではこれらの資料に加え、浮世絵などの絵画資料、明治大正期の写真を用い、失われた八百善の建築を復元的な考察、そして時代ごとの変化を分析することを試みる。

キーワード：1) 料亭建築, 2) 数寄屋, 3) 組立絵, 4) 国長, 5) 数寄屋,  
6) 枯券, 7) 上野公園, 8) 浅草, 9) 唐傘天井, 10) 桂離宮式

### A RECONSTRUCTIVE STUDY OF THE ARCHITECTURE OF THE RYOTEI 'YAOZEN' BASED ON RELATED DRAWINGS AND DOCUMENTS

-The period from the Bunsei Era to the Taisho Era-

Ch. Toru Yoda

Mem. Masaaki Horiuchi, Masataka Kanaya

The architecture of the Yaozen ryotei in Asakusa Yamaya was representative of Edo ryotei architecture, and was repeatedly extended, rebuilt and sometimes reconstructed from the early 19th century until it was destroyed by fire in the Great Kanto Earthquake of 1923. The family of Zenshiro Kuriyama, the head of Yaozen, left drawings and other documents relating to the architecture of Yaozen, as well as a type of paper craft known as an 'assembly picture'. In addition to these materials, this study attempts to analyse the lost architecture of Yaozen from a restorative perspective and the changes in each period, using ukiyoe and other pictorial materials and photographs from the Meiji and Taisho periods.

#### 1. 料亭「八百善」の研究目的と方法等

##### 1.1 八百善について

江戸時代、100万人もの人口を抱えた大都市江戸では、外食産業が発達した。江戸にも京都に劣らない料亭文化が華開いており、特に別格として畏敬された名店が「八百善」である。

八百善は18世紀前半に浅草山谷に開業した八百屋であり、その副業で仕出しをしながら、次第に料亭へと発展したという歴史を持つ<sup>注1)</sup>。店主は代々「善四郎」の名を襲名しており、八百屋の善四郎が略されて「八百善」の名称となった。八百善を大きく成長させたのが4代善四郎(1766～1839)であり、大田南畝(蜀山人)や亀田鵬斎といった江戸を代表する文人、また酒井抱一や谷文晁、渡辺崋山といった絵師とも交流を持っていた。八百善の名前は歌舞伎や落語などに登場するようになり、江戸の高級外食の代名詞として定着した。

八百善は明治維新以降も文人や政財界人によって支持され、明治9(1876)年には上野公園に支店を作っている。また東京で茶道が盛んとなる、安田善次郎(松翁)に代表される数寄者の茶会に仕出しをするようになる。

##### 1.2 八百善の建築

八百善は4代目の時に店舗が大きく拡張され、以来代々の当主によって増改築が繰り返された。この八百善の建築は、江戸東京を代表する料亭として浮世絵などにも描かれている。地震や火災による被災の度に再建されていたが、最終的には大正12(1923)年の関東大震災で焼失し、築地に移転することになる。

##### 1.3 研究の方法

この失われた山谷の八百善の建築について、これまで学術的に取り上げられた機会はなかった。近年、主査である

\*1 遠山記念館 学芸課長 \*2 昭和女子大学近代文化研究所客員研究員 \*3 法政大学江戸東京研究センター客員研究員

本研究ではこれらの情報を統合することで、失われた八百善の建築を想定復元し、さらに時代ごとの変化について考察することを試みる。なお、本稿は1・4節を依田、2節を堀内、3節を金谷が担当している。

山谷の八百善の建築（以下、八百善亭）の具体的な姿がわかる最古の資料は、歌川国長（1790～1829：ただし生没年不詳）の作画による「八百善組立絵」（以下、組立絵）と、八百善の4代善四郎（1768～1839）が著した『料理通』（刊行は1822年から）の挿絵であろう。

## 2.1 歌川国長の組立絵

筆者は、国立国会図書館が提供するデジタルデータを原寸大に調整した上で、ホワイトペーパー（厚 0.14 mm）に印刷したものを使用して組み立てた<sup>注2）</sup>。図 2-2 はその完成模型で、表 2-1 は、同図に記した棟別（①から⑦）の概要である。図 2-3 の現在の地図に八百善亭の位置を表示する。



表 2-1 組立絵の各棟の概要

202 住総研 研究論文集・実践研究報告集 No.51, 2024 年版

## 2.2 各棟について

### 1) 見世



図 2-4 見世（中央）の右（北側）に土蔵，左に奥座敷と離れに通じる出入口（「八百善」の暖簾が掛かる）がある。鬼瓦，棟，格子，押縁下見，垂木，土蔵の「つぶ」と折釘などの細部まで表現されている。



図 2-5 見世の1階（左端に青物置場，右手奥に箱階段），同2階を省略している。

### 2) 土蔵



図 2-6 土蔵の北側

### 3) 仕事場



図 2-7 仕事場の南側に出入口が2箇所ある。仕事場の前にある延段（石を敷詰めた路）は，奥座敷に通じる。



図 2-8 仕事場 2部屋に分かれ，南側（下）の土間に続いて奥に，10畳半間（東，右手）と8畳間（西）がある。模型では屋根は土間上のみ架かる。8畳間の奥に箱階段があるが，2階を省略している。

### 4) 玄関

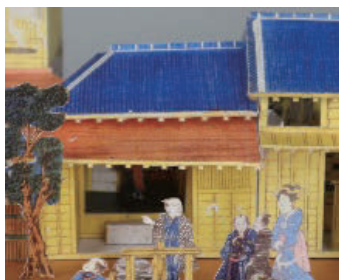


図 2-9 玄関の南側 間口は3間で，奥行1間弱の土間に下屋庇が付く。



図 2-10 玄関（右図は，北側から撮影）土間の奥に3畳間が2部屋続く。

### 5) 奥座敷



図 2-11 奥座敷（南側） 寄棟造の2階建て，1階に半間の縁側が張り出す。

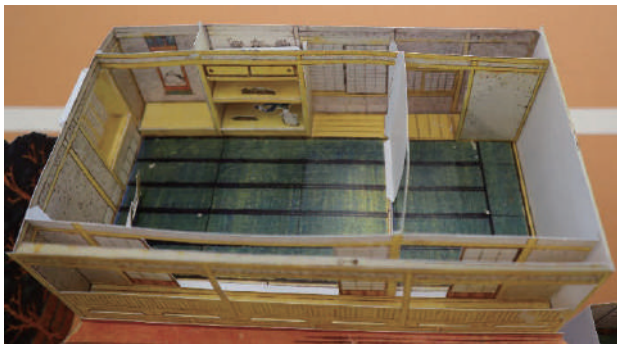


図 2-12 奥座敷 2 階 15 畳間と 7 畳半間の 2 室で、15 畳間（左）の北側（上）に床・棚・書院が付き、西側（左端）に付書院がある。南側に半間の内縁が付く。

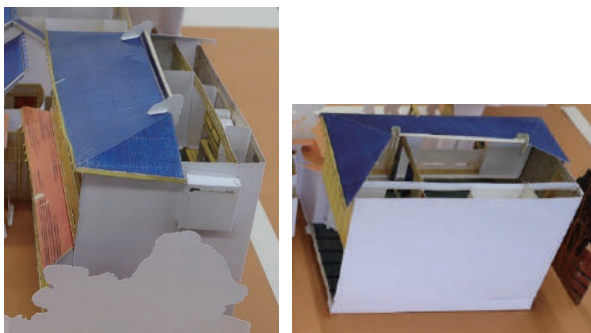


図 2-13 奥座敷（左は西側、右は北側）

## 6) 離れ



2-14 離れの南側と東側を見る（左）。右図は内部で、北側と西側の壁ならびに室内を省略している。

## 7) 社（稻荷社）

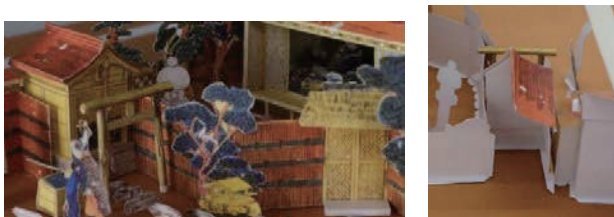


図 2-15 社と棟門（左）社の内側は省略（右）

見世、見世脇の出入口、土蔵、仕事場、玄関、そして奥座敷の屋根は青色であるのに対して、離れと社の屋根のほか、玄関と奥座敷の庇は茶色で塗り分け、さらに、棟門の屋根を黄色にする（図 2-15）。青色の屋根は棧瓦葺き、茶色のそれは板葺き、黄色は茅葺きであったと推察する。

## 2.3 八百善亭の配置図

図 2-16 は、組立絵の 1 枚（図 2-1 参照）に描かれた八百善亭の全景の拡大である。組立絵制作時の同亭の配置図は見出せないので、天保 14（1843）年頃と嘉永 5（1852）年頃とされる図面（図 2-17, 18）を参考に、組立絵から配置図を作成する。

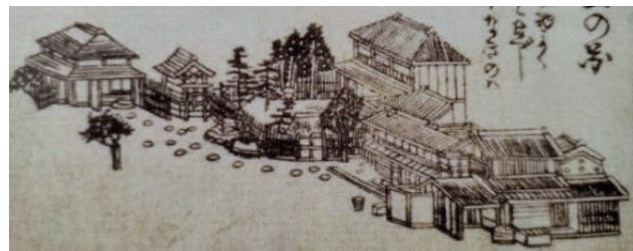


図 2-16 組立絵に描かれた八百善亭の全景 同図には「八百善見世と奥を見る図」とある。

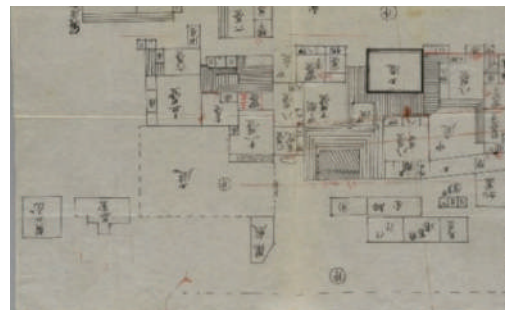


図 2-17 八百善亭の図面（天保 14 年頃）

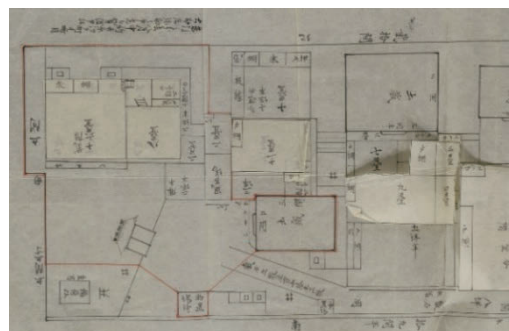


図 2-18 八百善亭の図面（嘉永 5 年頃）

図 2-17 に敷地の寸法記載はないので、建物や井戸の位置から判断して、敷地は、間口約 13 間、奥行約 26 間となる。

図 2-18 の右端（東側）に、間口 10 間 5 寸、北側に 20 間、そして南側に 19 間半の寸法記載がある。

図 2-19 は、組立絵の模型から推定した配置図である。敷地の奥行は図 2-18 と同じ 20 間に納まるが、間口はやや広く約 11 間半が必要となる。

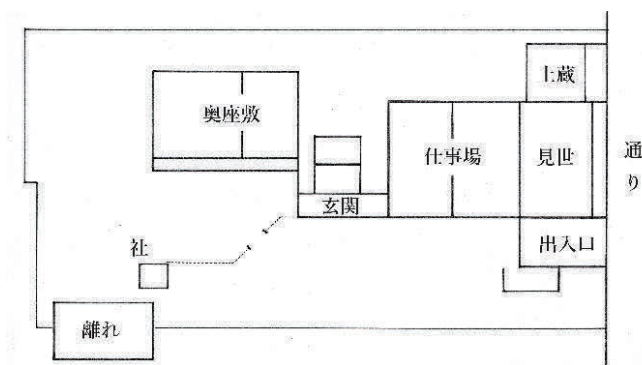


図 2-19 「組立絵」の各棟配置図（参考に、図 2-18 の敷地境界線を細線で示す。）

## 2.4 『料理通』<sup>注3)</sup> (1822 年刊) の挿絵との照合

挿絵の奥座敷（図 2-20）は、寄棟造の棧瓦葺きである。1、2 階に半間幅の戸袋があり、2 階の南面に欄干が付き、1 階に簀の子縁が張り出す。同 2 階側面（右手、東側）は下見板張りで、出窓が付く。



図 2-20 『料理通』の挿絵（中央に奥座敷、その右手に玄関、左手に社と離れ）

玄関のある棟は（図 2-20 の右下）、寄棟造、棧瓦葺きの平屋であり、入口に下屋庇が付く。玄関内では、踏み台に足をかけた武士と、畳敷きの寄付にお辞儀をする奉公人がいて、その奥に奥座敷と繋がる縁側が見える。ただし、玄関の桁行の長い屋根と、その下の縁側を回した坪庭の規模や位置が合致しない。

なお、玄関の左手前方に、茅葺き屋根の棟門がある。

同挿絵と組立絵の奥座敷はともに寄棟造で、欄干の意匠も同様であるが、以下の相違がある。

- ・組立絵の東側面は、押縁下見板仕上げで、出窓はなく、同南面に戸袋がない。
- ・組立絵の玄関も寄棟造であるが、玄関口を平側に構え、取次の奥に 2 部屋を設ける。また、組立絵の玄関から奥座敷ならびに仕事場へ通じる部屋を省略している。



図 2-21 制作模型を東側から見る。

## 2.5 組立絵の制作意図

組立絵は、八百善にきた客への土産として制作されたという<sup>注4)</sup>。図 2-21 は、八百善亭全景（図 2-16）の見世部分に合わせて撮影した模型写真で、両者の比較から、以下の相違が認められる。

・図 2-16 の組立絵の見世の棟は低く抑えられ、奥座敷の棟が模型以上に目立つ。

・図 2-16 は、奥座敷の南側の庭を広く取り、見世・土蔵、仕事場、奥座敷、稲荷社と離れの各棟、そして見世脇から玄関・奥座敷へと通じる延段までもがよく見えるように描く。

図 2-21 と図 2-22 から、組立絵は、通りに面する見世と土蔵、そして、敷地南側の全景の眺めを見せることを意図して制作されたことがわかる。

これら各棟が形成する外部の景観に支障がないように、各棟の西あるいは北側の屋根を適宜省略して、室内を俯瞰できるようにしている。

・組立絵では、奥座敷北側の階段を省略する。しかし、図 2-23 に見るように、奥座敷 1 階北側に廊下を透視図で描く。歌川国長は、八百善亭の北側面を省略しながら、内観では、より正確な描写を行っていた。

なお、組立絵に描かれた奥座敷と仕事場の畳（江戸間 176 × 88 cm）のサイズから、奥座敷（1 階）の縮尺は 1/49 から 1/53、仕事場のそれは 1/41 から 1/56 となり、約 50 分 1 で作画していたことになる。

最後に、室内意匠について長押の有無に触れる。再度、図 2-23 の奥座敷の展開図で柱と鴨居の関係に着目すると、1 階と 2 階の処理が異なっている。すなわち、1 階の鴨居は柱間にあるのに対して、2 階のそれは柱を横切っている。鴨居と長押を区別して描かれたと推察する。

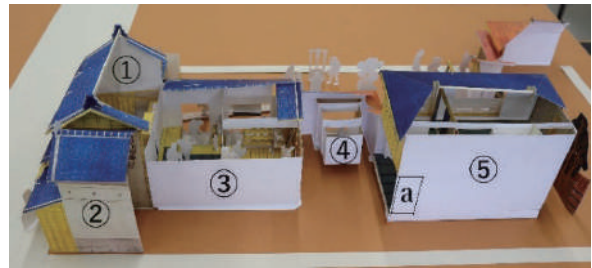
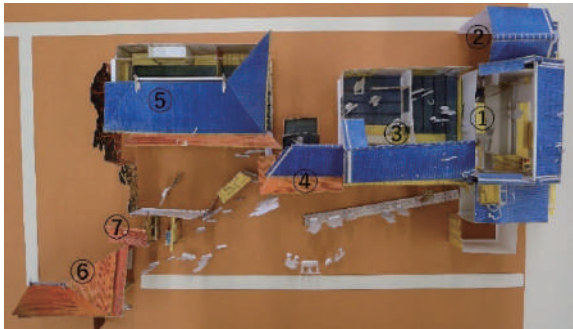


図 2-22 左は模型の真上を、左下は同南側を、上は同北側をそれぞれ撮影した。①見世、②土蔵、③仕事場、④玄関、⑤奥座敷、⑥離れ、⑦社（稻荷社）

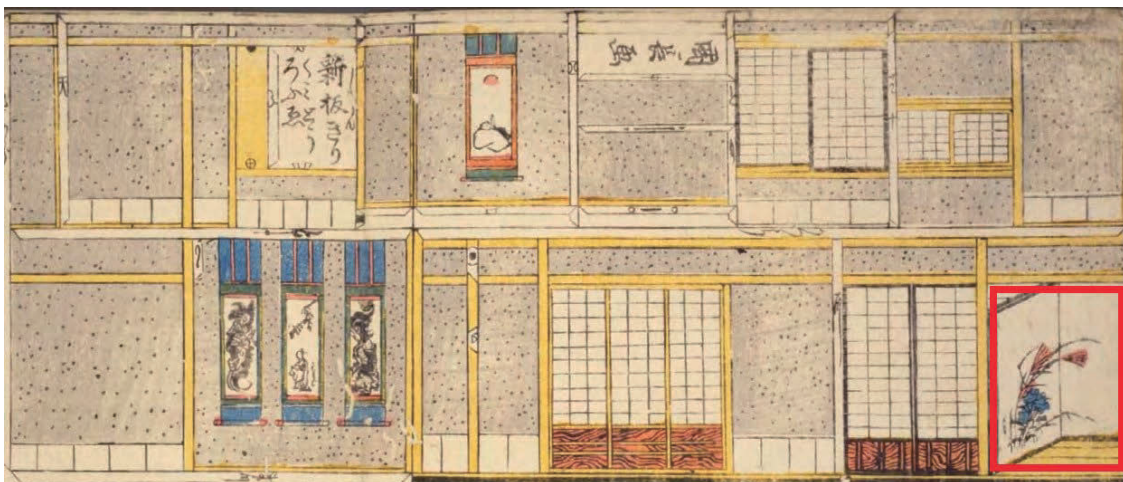


図 2-23 組立絵の奥座敷（下が1階、上が2階の展開図） 枠線で囲んだ箇所が透視図による廊下部分



図 2-24 奥座敷の北側。同1階の右端（北側）に、透視図による廊下部分の描写がなされている（参考、図 2-23 の枠線ならびに図 2-22 下 a の箇所）

## 小括

以上の考察を通じて、八百善組立絵については、以下のようにまとめることができる。

・組立絵の刊行年は、歌川国長の生没年（不詳 1790～1829）ならびに『料理通』（1822）の挿絵（図 2-20）との類似から、文化文政期（1804～1830）と考えられる。

- ・国長は、組立絵を約 50 分の 1 の縮尺で作画した。
- ・文化文政期の八百善亭の敷地は、組立絵の各棟の規模と配置状況から、間口約 11 間半、奥行約 20 間となる。
- ・組立絵の室内は、床、壁の仕上げをはじめ、床の間や神棚に至るまで詳細な書き込みがなされ、外観は、屋根の葺き材が区別され、垂木まで表現されていた。
- ・また、樹木、井戸の他、飛石・敷石、そして、奉公人と来訪者のパーツが多く用意され、料亭の設いと賑わいを演出していて、ペーパークラフトとしての質は高いと言える。
- ・八百善亭は文化文政期以後に、儉約令を施行した天保の改革（1841～43）を挟んで、増改築や新築がなされた（図 2-17, 18）。同改革以前の姿を現す組立絵には、長押が用いられていた可能性がある<sup>注 5)</sup>。

今後は、組立絵の間取りと意匠を抛り所に、天保の改革が八百善亭に及ぼした影響の有無を含んで、江戸時代における同亭の変遷に関する精緻な考察を課題とするほか、本組立絵の特質を、立版古を含む他の類例との比較により明らかにしたい。

### 3. 明治期における八百善の土地取得と上野八百膳

3節では、明治期の八百善の土地取得や周辺環境の変化を見ていきたい。また、明治9(1876)年に上野公園内に出店した八百善の支店は、同14(1881)年に閉店した後も同建物が利用されていた事が史料や文献より伺える。上野公園内にはどのような建物が建てられ、その後どのように変化していくのか明らかにする。

まずは、八百善亭の周辺環境が江戸時代からどのように変化していくのか確認し、八百善の土地取得についても見ていきたい。そのために、八百善所蔵の史料以外に、浮世絵や書籍なども含めた調査を行った。

#### 3.1 明治期までの八百善の土地所有と周辺環境の変化

江戸期から明治初期における八百善の土地取得について、都立中央図書館が所蔵する『沽券扣』<sup>注6)</sup>(台東区文化財調査報告書第38集、台東区教育委員会が翻刻したものを用いた)で伺うことができる。史料は、寛保元(1741)年から明治6(1873)年までの浅草新鳥越町1, 2丁目の町屋敷所有者の変遷を記録した非常に貴重なものである。新鳥越町は明治2(1869)年に浅草吉野町に町名が改称される。そのため、旧住所と新住所では地番の違いが見られる。

まずは『沽券扣』より、江戸期からの八百善の土地取得を見ていきたい。史料には「善四郎」と書かれた所有地がいくつか見られ、その土地取得の経緯がわかる。「善四郎」は、まず、文政4年(1821)に17番地の土地、6畝19歩(199坪)を地主吉兵衛から買い受けている。その面積から、町名変更後の吉野町21番地(195坪)が該当すると思われる。隣の18番地は、慶応4年(1868)7月21日に善四郎が購入したとされる。面積は2畝20歩5厘(約80坪)とあり、これは吉野町22番地の72坪に近い値である。この地は、明治2年になると徳川亀之助家来大澤三吉の伯母と代が地主となっているが、同5年(1872)には大澤直久の所有となっている。後述するがこの土地は明治末には、再び栗山家の所有となっていることがわかる。

その後の土地所有がわかる史料として、明治末年の土地所有がわかる『東京市及接続郡部地籍台帳』<sup>注7)</sup>があげられる。これにより、八百善の吉野町における土地所有及び周辺の状況について知ることが可能である。明治初期には風光明媚であったこの地は、明治末の地籍地図及び台帳をみると田地と町人地との間に通りが開かれ、西側の田地が開発されてきていることが読みとれる(図3-1)。八百善の裏側の田地は、明治末の地籍台帳では18, 19番地の土地が安田善次郎、24番地の土地が田中甚右衛門となっており、西側の24番の敷地にはコークス店が書かれている。

この裏の大規模な田地だった場所の所有者は、田中甚

右衛門という人物で、明治32年(1899)の『商工信用録』<sup>注8)</sup>(東京興信所)の調べによれば、田中は維新前より材木商を営んでいたとされている。大正6年(1917)の『帝国信用録10版』<sup>注9)</sup>をみると「材木」ではなく、「元材木」となっていることから、徐々に土地地主へと転換していったことが推測される。

明治末の八百善は、栗山善四郎名義で吉野町20, 21番地の土地(93坪, 195坪)を所有しており、栗山やえの名



図3-1 明治末年の浅草八百善の所有地(『東京市接続郡部地籍地図下巻』に追記)

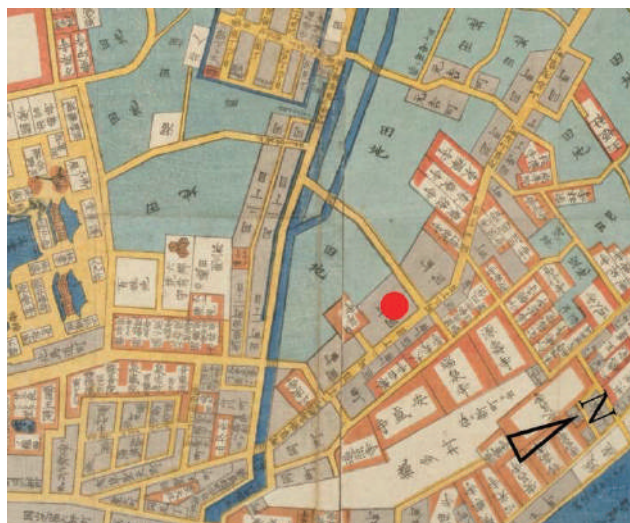


図3-2 「今戸箕輪浅草絵図」1853, (●印 八百善亭)



図3-3 「八百善の二階小窓より日本堤ふし見はらし」  
八百善亭2階小窓の景色として日本堤と富士山が描かれる。

義で 22 番地の (72 坪) を所有している。つまり、この明治期の間に 20 番地の 93 坪を取得していることが読み取れる。間口は、20 番地から 5.4 間、10 間、4.2 間となっている。また、これらの敷地の裏に接続する 24 番地について、栗山家には明治 39 年 (1906) の借用証書と付随する絵図面が残されており、土地を田中甚右衛門から借地している。明治 9 年の届出では、吉野町 17 番地の住所が使われている。

この立地がどのような場所であったのか、切絵図と浮世絵からその様子を探りたい。嘉永 6 年 (1853) の尾張屋版の江戸切絵図を見ると、八百善が所有する土地は街道沿いに面して町人地が並んでいることがわかる (図 3-2)。さらに敷地の西側は田地となっており、さらに西側に南北に日本堤が続く風光明媚な様子が窺える。

江戸期の八百善を描いた浮世絵の題材の多くは、2 階の座敷窓からの遠景に日本堤と富士山を描いている (図 3-3)。外部の眺望を意識した場所であった事が伺える。

3.2 上野八百善の建物と土地利用

上野八百善は、明治 9 年 (1876) に開業し、同 14 年に閉店となったとされる<sup>注 10)</sup>。栗山家には、その際に博物館と取り交わされた書類や建物売買の記録が残る。同 10 年 (1877) 8 月、国内で初めての内国勧業博覧会が上野にて開会した。

八百善は、その前年の 3 月 17 日に上野公園内に割烹店並びに小休憩所を設立することを願い出ている。この申請者は、「第六大区五小区本所菊川町式丁目廿六番地木山元卓方寄留」の「平岩亮吉」という人物で、上野八百膳の営業を任された人物のようである。建物の規模は、割烹店の建坪が 96 坪 2 合 5 勺、小休憩所が 25 坪 5 合、大工は石川惣助である。

同年に石川惣助によって作成された「普請仕様書」が残されており、それをみると割烹店の層建坪は 94 坪半となっている。座敷 1 棟、台所 1 棟で瓦葺、出庇、縁側雪隠柿葺きとある。

座敷は上之間から四ノ間まであり、各室に床が付いていたことが読みとれる。上之間が 16 畳、二ノ間が 12 畳、三ノ間が 9 畳、四ノ間が 9 畳となっていた。



図 3-4 上野八百善 座敷復元図 (金谷作成)

明治 11 年 (1878) に豊原國周によって描かれた浮世絵 (図 3-5) を見ると、手前から奥に向かって欄間が複数見られることから座敷は一続きになっていたことが推測される。

上之間から四ノ間までが一列に繋がっていたとすると 46 畳の大広間として使用できたことになる (図 3-4)。さらに、仕様書からは、玄関が 6 畳、長さ 13 間の土庇が付いていたこともわかる。

同 14 年 (1881) の「家屋売渡証」によれば、小休憩所は柿葺平屋建てで、割烹店と建物は連続していたことが伺える (図 3-6)。

大工の石川惣助は、八百善亭の建設にも関わっていた人物で、八百善全般の建物を手がけていたことになる。石川惣助について書かれた直接的な資料は見つからなかったが、『土木建築請負並に関係業者信用録』<sup>注 11)</sup>に掲載の勝田周太郎という土木建築請負業をする人物が、明治 32 年 (1899) までの 8 年間吉野町にいた石川のもとに就いていた、とある。このことから、石川は八百善の近くに住んでいた大工であったことが読み取れる。ちなみに、関東大震災後の築地に出した店の建築は、石川久雄を代表とする石川工務店と請負契約を結んでいる。ただし、この人物と石川惣助とのつながりは不明である。

建物の配置であるが、割烹店が敷地北側に東西方向を軸に L 字に置かれ、東側の先端部分に小休憩所が接続していた。そして、同年 10 月には建物が買い渡されている。しかし、八百善としての営業期間は短く 5 年後には店を閉じている。その後、桜雲台に建屋が売り渡されたことが、明治 14 年 (1881) 10 月 22 日の資料からわかる。家屋の買受人は杉山弘憲という人物である。

この八百善の建物であるが、その後も改修されながら使われ続けていたことが複数の資料から伺える。そこで、ここからは、国会図書館の所蔵資料などを用いて、建物



図 3-5 「開化三十六会席」  
上野八百善を描く

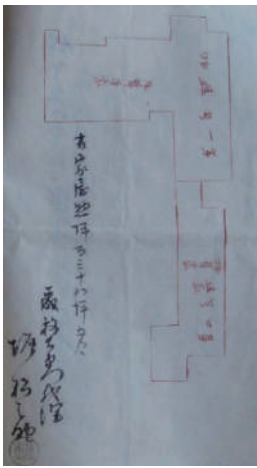


図 3-6 家屋売渡証 (八百善所蔵)

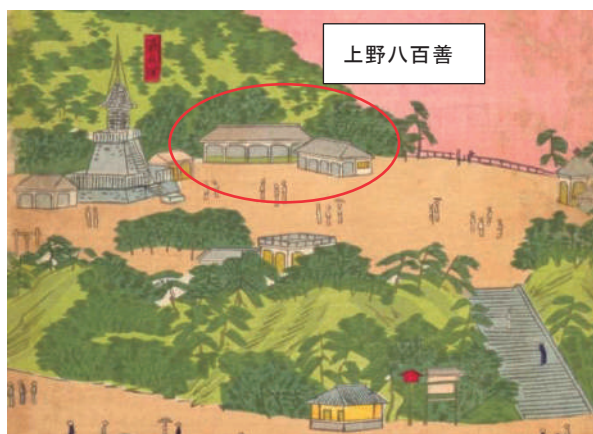


図 3-7 赤丸箇所が上野八百善（「内国勸業博覧会之図」に追記）



図 3-8 梅川楼（旧上野八百善）正面写真



図 3-9 「東京自慢名物会 八百膳」, 1896

がどのように変遷したのかを明らかにする。上野八百善があった場所は、その後桜雲台、暢春閣、梅川楼、常磐花壇と店舗が変遷したことが資料から伺える。

まず、明治 22 年(1889)の『中外医事新報(233)』<sup>注 12)</sup>において「上野公園内八百膳桜雲台」にて百有余名が祝宴を開いたという記述が見られる。翌年(1890)の『東京百事便』<sup>注 13)</sup>には「八百膳桜雲台」の項があり、「近来新に東方の鉄道停車場の側に道を開き二階附大広間を新築し名けて桜雲台と云ふ楼上二百餘人を容るべくして其東南は府下百街を一瞥し西北は公園の花月を眺むべく頗る大集会■とには適当なり」とあり、この時に大広間のある二階家が新築されたという。また、項目には八百膳の名前が残っており、認識として建物は変わっていなかつ



図 3-10 1913 年に描かれた上野八百善の様子

たことが伺える。

同 23 年(1890)の『北越医会会報 (24)』<sup>注 14)</sup>「会員若杉渡邊両医学士卒業祝宴」では「桜雲台の楼上に開く台は上野公園内眺望最も宜しき処にあり」と書かれ、楼上から上野公園が一望できたことがわかる。そして、明治 29 年(1896)刊行の『新撰東都名所図会』<sup>注 15)</sup>には、「桜ヶ峯の東崖にあり（八百善支店）層楼書欄。（中略）目下修繕中なれば。縷々記載すまじ。とまれ修繕後はさらに一層の観あるべければ」とあり、八百善の支店として認識されていること、修繕工事を行っていることが伺える。また、同年の「東京自慢名物会」にも「八百膳」として描かれている(図 3-9)。

翌年(1897)の『東京新繁昌記』<sup>注 16)</sup>では「暢春閣は桜ヶ岡清水堂の東に当る割烹店にして旧桜雲台の在りし所なり」となっていて、店名が変わっている。

さらに、同 33 年(1900)年『日本之名勝』<sup>注 17)</sup>には、梅川楼として「桜ヶ岡の辺にあり前年、桜雲台の建築ありて、地の美観を添へしが、今の楼主これを譲りうけて、梅川楼と改称すると共に、室を佳麗にし割烹を良好にして」、「二層の高楼緑樹参差たる間に聳ゆ」とあり、外観写真が掲載される(図 3-8)。写真を見ると、玄関前に人力車が止まり、建物は総 2 階建てで、2 階の窓に欄干が付いている。大正 2 年(1913)に描かれた銅版画「上野東照宮境内図 附上野公園全景」を見ると、2 階建てと 3 階建ての建物に平屋から変わっているが、建物の配置については変化していないことが読み取れる(図 3-10)。

『国史学のしをり』<sup>注 18)</sup>には、明治 24 年(1891)古希の賀宴を桜雲台にて開き、「来会する者がおよそ三百名」いたという。また、同 22 年(1889)の『私立奨進医会雑誌 第 1 年(9)』<sup>注 19)</sup>「東京医事近況」<sup>注 19)</sup>に「百七十名程相会して懇親会を開き」とあり、多人数の宴会に対応できる大広間があったことが推測される。その後の改修で、非常に大人数が入れる座敷が作られていく様子が窺える。

#### 小括

八百善亭、上野八百善とどちらも当初は風光明媚な土

地を求めて建てられたことが推測される。いずれも、2 階の窓からの眺望が浮世絵の題材となっていた。

上野八百善についてはその後も改修されながら、大人数に対応できる大広間が作られていくことが読みとれた。また、関東大震災後に移転する築地は、周辺を堀で囲われ外からは閉ざされた建物であることがわかる。

#### 4. 大正期の八百善の復元考察

##### 4.1 明治期から大正期への変化

次いで本節では、明治期から大正期にかけての、八百善亭について見てみたい。明治 45 年 (1912) の『建築工芸叢誌』2 号に、SS 生「八百善の客室」という小論が掲載されている。SS 生については不詳であるが、八百善の建築について次の様に言及している。

「浅草吉野町の八百善は、生粋の江戸料理である。家の構へも無論江戸式である。内へ入ると、電車に乗って来たことも、人車に乗って来たことも忘れて、何だか頭髪を丁髷にでも結つてゐた、江戸時代の人間になつたやうな気になる。

玄関を上つて、取付の左の部屋へ入ると、其処は、丸木の柱に竹の縁と云ふ造りで、西に面した方の鴨居は、非常に低く、高さ四尺ぐらゐの障子が二枚たつてある。南には四枚、これは普通の障子である。北の隅に床の間がある。それがまた無造作に出来てゐる。<sup>注 20)</sup>

ここでは建築の印象を示すだろう「江戸式」という言葉が用いられている点、それを特徴付けるかのように鴨居が低かった点、そして無造作という形容詞が用いられている点を確認したい。

この「八百善の客室」には、八百善亭の間取りについての言及もある。玄関を上がって左側に 7 畳の「取付」があり、その隣には 7 畳の「竹の間」があった。そして襖を開けると 30 畳程の広間があったとするが、これは別棟奥座敷の一階を指している。また仕事場の 2 階に上がると、後述する 8 畳の「普茶の間」があった。総じて 1 階は薄暗く、2 階は明るかったという、印象の違いが強調される。さらにこの記事には「八百善竹の間」「八百善の庭」「八百善普茶の間」と 3 枚の写真が掲載されていた。この 3 枚は、刊行年から確実に明治年間のものと特定できる点が重要となる。

この直後、大正 2 年 (1913) に 8 代栗山善四郎 (1883 ~1966) は八百善亭を改築した。これについては高橋義雄 (簞庵) が記録を残しており、その日記『萬象録』に次の記述がある。

「午後三時より八百善の新宅開きに招がる。八百善は今度旧家屋を改造して二階に十五畳三間続きの座敷を造りたるに就き、(中略) 寄附は旧家屋の木材を利用して造りたる十一畳床附きの間にして (中略)、

二階の広間は桂離宮式を採用し、面皮普請にて概して角張らず先づ以て上出来の方なり。<sup>注 21)</sup>

この時の改築の中心となるのは奥座敷 2 階の書院であった。「組み立て絵」の段階では 2 間であったが、この時点では 3 間続きとなっている。高橋はその改築について、面皮柱が多用されていた点を強調しながら「概して角張らず」と形容し、さらに「桂離宮式」と要約している。他方でこの他の部分は旧材を用いながらも、以前の間取りを極力残していたとも述べている。

##### 4.2 大正期の奥座敷 2 階大広間

この改築後の写真については従来、八百善所蔵のスクラップブックに貼られている印刷物の切り抜き 7 枚が確認されていた。今回の調査により、この切り抜きが『住宅建築写真集成 第 4 輯』(1918) からのものであることが確認でき、新規に 1 枚が確認され総計 8 枚となった。この内「竹の間」の写真は先述の『建築工芸叢誌』と共通しており、明治期の写真が混ざっていることになる。ただし二階大広間として床正面、付書院、次の間床正面の 3 枚があり、これは改築後のものと見られる。この 3 枚を基に、離れ座敷 2 階の間取りを復元した (図 4-4)。高橋の記述通りの 15 畳が書院、次の間と続いているが、三の間の写真はない。書院の床の間は北向きだった江戸時代とは異なり、西向きに変更され、複雑な棚が付属している。特に付書院の欄間は、かつて錦絵にも描かれた瓢箪透しの意匠から、より複雑な透かしの入った欄間へと変更されている。おそらくこうした特徴を、高橋は「桂離宮式」と評したのだろう。

##### 4.3 大正期の仕事場 2 階

改築前後の変化が確認できるのが、8 畳の「普茶の間」である。先の「八百善の客室」では、「普茶の間」を明治初年に長崎で普茶料理を出す部屋を模した部屋と説明し、特に天井に大きな特徴があったとする。「八百善の客室」には次の間側から撮影した写真 (図 4-1) が掲載されており、この天井が唐傘天井であったことが確認できる。また奥の壁向かって右側にある床の間は、下に地袋を供え、上には左官仕事で七宝の透しを入れるというものであった。さらに左側には同じ間口で、天袋を供えた床脇が接続していた。

『住宅建築写真集成』には、同じ唐傘天井の 8 畳間を、やはり次の間側から撮った写真 (図 4-2) が掲載されている。こちらが改築後のものとなり、外観が大きく変わっている。最大の変化は床の間が壁の中央に移動している点であり、また落掛けには白竹を用い、両隣は左官壁として床脇をなくし、全体に軽快な意匠となっている。

そしてこの『住宅建築写真集成』の別の写真と照合すると、「普茶の間」の床の間に向かって左側に、数寄屋書

院の「松の間」が隣接していたことが判明し、その平面図を復元した（図4-5）。「松の間」は15畳と推定され、複雑な構成の床の間と棚を備え、また5畳の入側が付属していた。この「松の間」と「普茶の間」が、仕事場2階の主要な客室となっていた。

#### 4.4 庭園の改作と「江戸趣味」

さらにこの大正2年の改築に際して、庭園も改作された。これについては高橋が、「山谷茶会」に次の様に述べている。

「唯此広間前面の庭は新築前までは赤松一本、石燈籠一基、低き生垣の内に苔蒸したる鉄鉢形蹲踞石一個と云ふ大見識にて、此庭に向へば其昔抱一上人が画筆を手にして坐したる姿の目に浮かぶ様なりしに、改築後之を一掃して全く其面影を失ひたるは、なんぼう無惨の事さうぞ。主人も未だ年若ければ、他日自ら思ひ当りて旧時の姿を回復する時あるべきか、至嘱々々。<sup>注22)</sup>」

この改作前の八百善の庭園については、『建築工芸叢誌』に写真（図4-3）が掲載されており、まさに高橋が述べたようなシンプルな構成である。高橋はそこにある種の古様の美を見出しており、石組みを作る改作を「なんぼう無惨のことさうぞ」と酷評する。

以上の点から、この大正2年の改築によって、八百善の建築が方向性を変えたとい指摘できる。高橋の言葉を用いれば、改築前は「江戸式」であり、それが改築によって「桂離宮式」になったことになる。この「桂離宮」というキーワードで一つ想起されるのが、柏木貨一郎（探古）の存在である。江戸幕府の小普請方棟梁の家に養子に入った柏木は、明治維新後に文部省に出仕し、その傍らに近畿の数寄屋建築を学習したとされる。そして明治20年頃には設計業に携わり、井上馨（世外）や益田孝（鈍翁）ら政財界人の邸宅を手掛けるようになっている<sup>注23)</sup>。壽々木雪山「近世名匠傳（一三）日本建築家柏木貨一郎」の下記の記述によれば、その特徴は桂離宮や醍醐寺の意匠を取り入れるというものであった。

「偶々当時の博物館長町田久成の知る所となりて、博物館御用に挙げられ、奈良正倉院御物整理の命を拝して、三たび奈良に在勤し、（中略）且つ此間奈良京都等の古建築物を研究し、利休、宗遍（ママ）、織部、遠州等茶博の意匠を探りて、之れを住宅其他に応用するの工夫をめぐらし、後官を辞して建築の業に復し、富豪其他の需めに応じて設計したる処多し。（中略）是等の中には桂離宮建築の或部分を応用したるものあり、或は醍醐寺三宝院の建築を模し、又は折衷したるものあり（後略）<sup>注24)</sup>」

すなわち明治中期以降、数寄者の邸宅は柏木による関西数寄屋の影響が流入していたことになる。八百善の改

築も、この関西数寄屋の影響と捉えることが可能だろう。

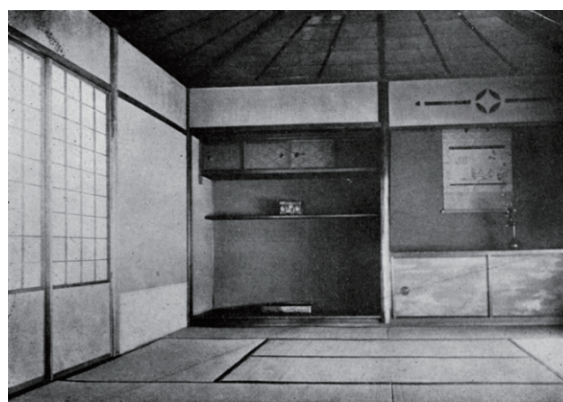


図4-1 普茶の間（改築前）

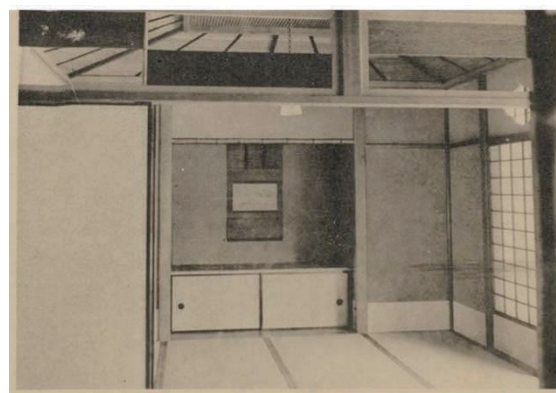


図4-2 普茶の間（改築後）



図4-3 八百善の庭園（改築前）

#### 小括

八百善亭の奥座敷2階の大広間は、文化文政期の2間から、3間続きへと間取りを変化させている。ここに前説の上野八百善の増築を加えると、大規模宴会に対応していくという近代的な広間の利用の変化が読み取れる。また「普茶の間」の唐傘天井は、当初長崎の明清風の部屋として作られたが、そこに明治期に京都風数寄屋の影響が加味された例と見られる。

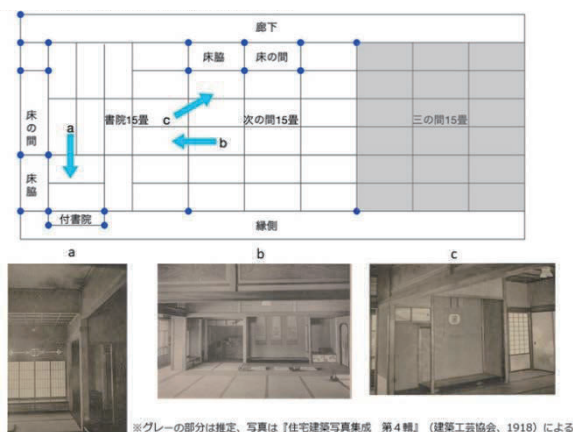


図 4-4 離れ座敷二階の復元図（依田作成）

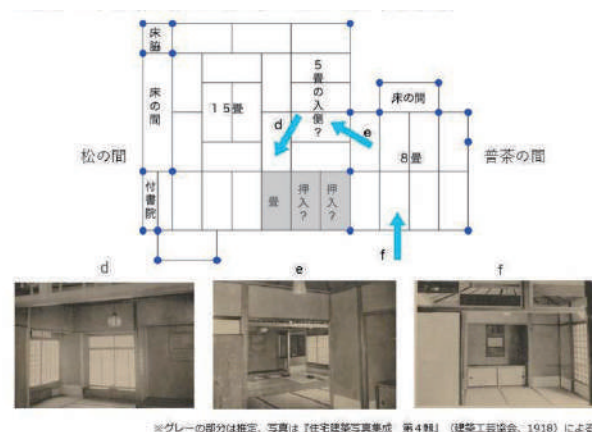


図 4-5 仕事場二階の復元図（依田作成）

## 総括

以上、八百善の建築は文化文政期から大正期にかけての増改築の変化が把握できる、極めて稀有な例と言える。特に今回の分析では、第一に八百善亭の文化文政期の状況、第二に上野八百善における運営形態の変化、そして第三に明治期における八百善亭における改築を跡付けた。

この一連の流れの中で、一つには大宴会に向けて料亭の広間が拡張されたという歴史が浮かび上がってくる。また八百善を特徴づけていた「普茶の間」の唐傘天井は、本来は長崎の異国風建築に起源を持っていたが、明治期の改築では京都系の数寄屋が加味された形跡もみられた。料亭は例外的な和室であるが故に、こうした様式の混交が可能であったとも考えられる。そしてこうした料亭が作り出した新様式が、その後の住宅にフィードバックされていったのではないだろうか。そうした和室の変化を考える上でも、料亭建築の存在は見直されるべきである。

## <注>

- 1) 八百善の歴史をまとめたものに、『江戸の名門料亭八百善—その食と文化—』（昭和女子大学光葉博物館、2022）がある。
- 2) 以下のデータを使用した。国長<歌川国長>//画『八百善組立絵』、和泉屋市兵衛、刊。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1286945>（参照 2022-06-30）なお、模型制作に、金谷匡高、西田和希、武藤茉莉 3 氏の協力を得た。
- 3) 『料理通』は初編から四編まで順に刊行された。図 2-20 は『料理通初編』（文政 5、1822 年）に掲載。また初編には、中央に八百善亭、背景の右に浅草寺、左に新吉原、そして奥に富士山を望む鳥瞰図が載る。これ以外の関連挿絵は以下の通り。  
『料理通二編』（文政 8、1825 年）：八百善亭新築中の図  
『料理通三編』（文政 11、1828 年）：八百善亭奥座敷 2 階
- 4) 宮尾登美子著『菊亭八百善の人びと』、新潮社、1994、p. 114
- 5) 組立絵における奥座敷と同様の長押の表現は、そのほか、玄関、仕事場などにも見られる。しかし、例えば奥座敷を描いた「山谷八百善」（1830 年代、サントリー美術館蔵）には長押はない。
- 6) 『沽券扣』台東区文化財調査報告書第 38 集、台東区教育委員会
- 7) 『東京市及接続郡部地籍台帳』2、東京市調査会、1912
- 8) 『商工信用録』東京興信所、1899
- 9) 『帝国信用録 10 版』1917
- 10) 栗山恵津子『食前方丈：八百善ものがたり』講談社、1986
- 11) 帝都興信所編『土木建築請負並に関係業者信用録』帝都興信所 1930

- 12) 日本医史学会[編]『中外医事新報』（233）、日本医史学会 1889
- 13) 三三文房編『東京百事便』三三文房、1890、p. 676
- 14) 北越医学会事務所編『北越医会会報』（24）、北越医学会事務所、1890、p. 46
- 15) 東陽堂『新撰東都名所図会』1896、p. 2
- 16) 金子佐平（春夢）編『東京新繁昌記』東京新繁昌記発行所、1897、p. 130
- 17) 瀬川光行編『日本之名勝』史伝編纂所、1900 国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/762809>（参照 2024-10-30）
- 18) 小中村清矩『国史学のしをり』『小中村清矩先生小伝』、1895、p. 8
- 19) 『私立奨進医会雑誌 第 1 年（9）』私立奨進医会、1889、p. 21
- 20) SS 生「八百善の建築」『建築工芸叢誌』第 1 期（2）、1912、p. 34
- 21) 『萬象録 高橋箒庵日記卷二』思文閣出版、1986、p. 14
- 22) 高橋箒庵『東都茶会記 二』淡交社、1989、p. 211
- 23) 柏木に関する研究としては、近江栄「近代和風建築を支えた工匠に関する史的研究（梗概）」（『住宅総合研究財団研究年報』18、1991）、大川三雄「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価」（『日本建築学会計画系論文集』459、1994）がある。
- 24) 壽々木雪山「近世名匠傳（一三）日本建築家柏木貨一郎」『建築工芸叢誌』第 2 期（15）、1916

## <図版出典>（図版は適宜切り取りを行っている）

- 図 2-1、16、23、：『八百善組立絵』国立国会図書館（前掲書）  
図 2-3、19：作図、堀内正昭 / 図 2-17、18：八百善所蔵  
図 2-20：栗山善四郎『江戸流行料理通大全』（天保 6、1835 年）和泉屋市兵衛（版元）それ以外の組立絵の写真は、堀内正昭撮影組立絵完成模型は昭和女子大学光葉博物館所蔵  
図 3-1：東京市及接続郡部地籍地図 下巻、東京市調査会、1912  
図 3-2：今戸箕輪浅草絵図、尾張屋板、1853、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1286208>（参照 2024-10-30）  
図 3-3：「八百善の二階小窓より日本堤ふし見はらし・八百屋半兵衛」広重、豊国、1852、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1308508>（参照 2024-10-30）  
図 3-5：「開化三十六会席上野八百善」豊原国周、台東区立図書館蔵  
図 3-7：「内国勸業博覧会之図」方円舎清親、1877、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1302985>（参照 2024-10-30）  
図 3-8：前掲 17）  
図 3-9：「東京自慢名物会 八百膳」1896、都立中央図書館蔵  
図 3-10：霜島巴浚/画 小林桃山/彫刻『上野東照宮境内図 附上野公園全景』1913、台東区立図書館蔵  
図 4-1、3：『建築工芸叢誌』2 号、建築工芸協会、1912  
図 4-2『住宅建築写真集成 第 4 輯』建築工芸協会、1918